恋愛小景

後朝　「深酒」

さつき

起

　見覚えの無い部屋で女は目を覚ました。小洒落た部屋の天井が目に入った。そのまま上半身を起こす。裸身の様であった。布団も自分が使っているものではない。必死に昨晩の記憶を探りつつ、辺りを見回す。
　「……あ、ああ。そういうことか」
一人納得したのは昨晩の記憶を手繰り寄せたからではない。手繰り寄せるきっかけを発見したからだ。同じように隣で寝ている男が女の目に入ったのだ。同じように裸身。この状況を見るに、恐らく同衾したらしい。男は女の知人であった。
「むぅ…ん」
背を向けて寝ていた男が寝返りを打つ。その様子を見ながら、女は昨晩の記憶を手繰り寄せていた。

承

　「別れたんだって？」
男が大真面目な顔をして女に問い掛けた。さしたる大問題でもない、
そんな顔をして女が顔の前で手を振る。
「大事でもないよ。前々から考えていた事だったしね。それにしても
耳が早いわね」
「……彼から聞いたよ」
「彼、来たのね」
「君と別れた直後に」
「そう」
振っていた手をロックグラスに掛けて中身を飲み干す。
　場所は同衾した男の経営するバー。女はここで恋人と出会った。一
緒に飲むようになり、付き合いが深まって恋人となることになったのは
二年前の話。付き合いが決まった時と同じように、女はここに報告に
来ていた。
　男は、空になったグラスに新しく酒を作る。夜も更けたせいか他に
客は居ない。
「あの人律儀ね。報告に来るなんて」
ぽつりと女がつぶやいた。それに被せるように男が言う。
「君だって一緒だろうに」
肩をすくめてあらぬ方を見ながら言う。
「いきつけのバーに来づらくなるのは誰だって嫌でしょう」
「確かに」
　男はちらとカウンターの内側にあるデジタル時計に目を走らせた。
閉店時間が迫っていた。
「さて、そろそろ閉店でしょう？お勘定して」
新しく作られた酒を全て喉に流し込むと、女は席を立った。
「さっき来たばかりだろうに」
「そういう時間を狙って来たのよ。人聞きのいい話ではないし」
「まぁ、確かにね。少し待って」
　男はカウンターから出ると、店の入り口にあるスイッチを操作した。
「一応閉店にはしたけど、もう少し飲もうか。僕のおごりにしておく
から」
そして女の隣に座る。取り出しかけた財布をしまって、女も元の席に
腰掛けた。
「後悔しても知らない程飲むかもしれないけど、いいの？」

「そうなった時に後悔するからいいさ」
相変わらず変な人、とつぶやいて、女はバッグから煙草を取り出した。

　女が手繰れる記憶はそこまでだった。どうやら相当深酒をしたらしい。
（それでこの始末、か）
決して女はこの男を嫌いではなかった。寧ろ好意を抱いている方だ。か
といって同衾をする程の熱を帯びたものではない。
（さて、どうしたものか）
　ベッドの脇を見ると自分の服が散乱している。そそくさと身支度をし
て帰る気持ちもなく、ぼんやりと眺めていると男が目を覚ました。
「おはよう」
女が声を掛けると、寝ぼけた声で「おはよう」と返ってきた。
「二日酔いにはなってない様だね」
「そこまで飲んだの？私」
「ボトルが一本空いたよ」
「そう」
　女がベッドから降りて下着を身に着けている様子を見て、男はぽつりと
つぶやいた。
「嫌だった？」
女は極力男の方を見ない様にしながら答える。
「そういうわけではないけど、我ながら情けないなあと」
「何が」
促すような男の声に、女はベッドの端に腰を下ろした。
「ここまで深酒するとは思わなかったから。たかだが男一人のことで」
床に落ちていたバッグを引き寄せると煙草と携帯灰皿を取り出し、火を
点けた。
「本気、だったのかな」
「多分ね」
「こんなに取り乱す程本気じゃなかった筈なんだけどね」
後ろで男が動く気配があった。女は振り向かずに続ける。
「私があなたを求めたの？」
「昨日のことは？」
「覚えてないの」
「そうか。僕も求めたよ」
「『も』なのね」
「『も』だよ」
　女の肩が震えていた。その背中から視線を外すことなく、男は枕元に
あった煙草に手を伸ばした。

結

　それから一時間後。女は身支度をして、男の家の玄関に立っていた。
「それじゃあ、また来るわ」
「店に？ここに？」
男は下着一枚のまま玄関の壁にもたれかかっている。女は苦笑しながら
昨晩と同じように顔の前で手を振った。
「ここに来る理由はとりあえずないからね」
「送らなくても本当に大丈夫？」
くすりと笑うと、「タクシーつかまえるから」と言い残して女は玄関を出た。
　マンションの階段を降りながら、女は熱い雫が頬を伝っているのを感じ
ていた。その雫は住宅街を抜け、大通りに着くまでには乾いていた。だが、
何の涙なのかは女にも分からなかった。

終